

2012年11月27日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 長島 敏樹 様

甲南女子大学図書館	中岡 妙子
成城大学図書館	杉本 正武
同志社大学図書館	池口真梨子
東洋大学国際部国際推進課	船津 幸子
立正大学情報メディアセンター	島田 貴司
龍谷大学図書館	村上 孝弘

(大学 50 音順、6 大学 6 名)

2012年度 私立大学図書館協会 海外認定研修報告書

2012年6月28日(木)より7月1日(日)まで、韓国の私立大学4校の4つの図書館を訪問いたしましたので、別紙のとおりご報告いたします。

今回の視察は上記6大学6名で行っておりますが、同志社大学図書館の池口真梨子と東洋大学国際部国際推進課の船津幸子は公費での視察が認められており、今回の助成申請はそれ以外の4大学4名にて申請させていただいております。また、東洋大学国際部国際推進課の船津幸子は2012年3月末日までは東洋大学図書館に所属しておりました。

I. 研修概要

1. 研修に際して

昨年12月に2011年度私立大学図書館協会海外集合研修で米国北東部の大学図書館を視察させていただいたメンバーが、米国北東部の図書館事情だけではなく、他の国の状況はどのようになっているのかを疑問に思ったことが、今回の研修が行われるきっかけになった。日本から最も近く、各大学においても様々な協定を結んでおり、近年、経済成長が目覚しくその原動力の一つとして考えられる韓国の大学図書館を訪問させていただくことはとても有意義であると考えた。

2. 訪問大学

- ① 延世大学校（新村キャンパス）
- ② 梨花女子大学校（新村キャンパス）
- ③ 東国大学校（ソウルキャンパス）
- ④ 成均館大学校（水原キャンパス）



3. 研修日程

期間：2012年6月28日（木）～2012年7月1日（日）

- | | |
|--------------|------------------------|
| 1日目：6月28日（木） | 移動日（各自、ソウルのホテルに集合） |
| 2日目：6月29日（金） | AM：延世大学校
PM：梨花女子大学校 |
| 3日目：6月30日（土） | AM：東国大学校
PM：成均館大学校 |
| 4日目：7月1日（日） | 移動日（解散、各自帰路へ） |

II. 事前準備

1. 訪問先大学図書館へ問い合わせ、日程調整

訪問先大学を検討し、それぞれ、訪問依頼を申請し、日程を調整。

2. 通訳の依頼

各訪問先の大学での通訳を個別に依頼。

3. 訪問先への質問事項リスト作成、送付

参加者から各訪問先への質問事項を収集、調整してリストを作成し、出発前に送付。

III. 研修報告

目次

1. 訪問機関概要

- | | |
|-----------|-------|
| ① 延世大学校 | p. 3 |
| ② 梨花女子大学校 | p. 8 |
| ③ 東国大学校 | p. 13 |
| ④ 成均館大学校 | p. 16 |

2. 今回訪問した韓国大学図書館の特徴

p. 20

3. むすびにかえて

p. 20

4. 謝辞

p. 22

1. 訪問機関概要

①延世大学校

訪問日：2012年6月29日（10:00～12:30）

<大学について>

所在地	ソウル市西大門区
WEB ページ URL	http://www.yonsei.ac.kr/ http://www.yonsei.ac.kr/eng/index.asp
学校種別	私立総合大学
キャンパスの立地	都市
キャンパス寮	あり
学生数	学部生：21,480人 大学院生：6,668人
大学創立年	1885年

<概要>

延世大学はキリスト教の教えに基づき、真理と自由の精神により社会に貢献できる指導者を育成することをミッションとしている。ソウル市内のキャンパスには教養学部（文学、理学）および経営学・経済学、理学、工学、神学、社会学、医学、歯学、看護学、法学、教育学、商法学、衛生学、環境学、音楽などの22の学部、総合大学院および連合神学、経営学、教育学、一般行政学、行政学、衛生学、工学、国際学などの専門大学院がある。原州キャンパスに医学部などを擁しており、韓国最大規模の私立大学である。多くの学部・大学院と研究センターがあり、全て英語で講義が行われるアンダーウッド国際大学（Underwood International College）も設立され、世界基準の教育研究機関へと躍進している。

学術情報センターは2008年に先端IT施設、複合文化空間、快適な研究学習空間を備えた延世・三星（サムソン）学術情報センターを開館した。広大なキャンパスのほぼ中心に位置し（図1）、サムソンから300億ウォン（総工費の半分）の寄付をもとに建設され、伝統的なスタイルの中央図書館との2館で構成されており（図2）、今回は先進的なIT技術を駆使するサムソンライブラリーを見

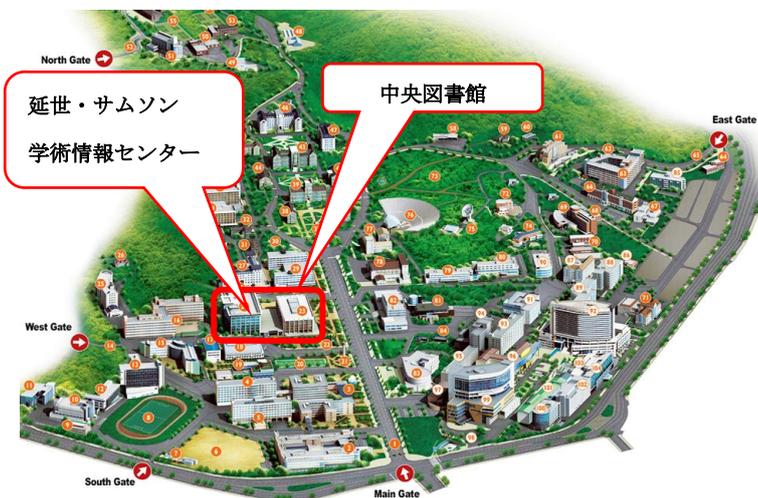


図1 キャンパスマップ



図2 前方：中央図書館
後方：延世・サムソンライブラリー

学させて頂いた。

施設は地上7階、地下3階から成り、屋上には庭園とカフェがある。館内は蓋付き飲料の持ち込みのみ可で、アメリカと異なり基本的には飲食禁止である。中央図書館の1階閲覧室を除いては24時間開館ではないが、閲覧室は朝の6時から23時まで開いており、その他も開講期間中は9時から22時まで開室している。およそ190万冊の蔵書と16,000冊の定期行物が揃っているが、サムソンライブラリーには冊子体が置かれているのを見かけなかった。この施設は、図書館の機能と文化的機能と休憩のスペースという3つの機能を備えているとのことであり、①Ubiquitous Library (ユビキタス・ライブラリー) ②Cultural Library (カルチュラル・ライブラリー) ③Convenient Library (コンビニエント・ライブラリー) の3つのコンセプトが掲げられている。コンセプトに沿った先進的な図書館のあり方を追求しており、従来の図書館のイメージを一新させる空間、施設であった。

韓国では2000年以降政府主導による図書館整備・情報化の推進が国家事業として行われ図書館は情報化政策の中心を担う機関として、その存在が重要視されているとのことである。



図3 中央図書館エントランス

<館内施設見学>

正面入口から入館するとまずは中央図書館のエントランス(図3)があり、在学学生はICカードで入館できる。入館後に横の階段へ進むと伝統的なスタイルの図書館空間が広がっているが、このままここをまっすぐ進むと後方に位置するサムソンライブラリーにつながっており、冊子体を目にすることなくユーラウンジ(ユビキタスラウンジ)と呼ばれる広い空間へ出る。

先ほど概要で触れた3つのコンセプトに沿って施設の特長について述べる。

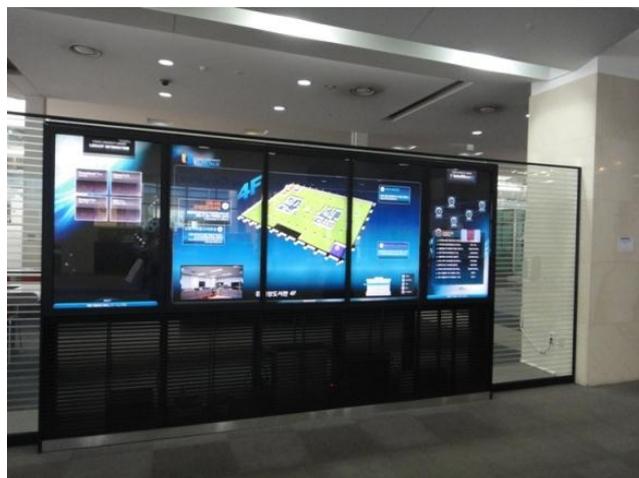


図4 インフォメーションパネル

① Ubiquitous Library (最先端IT基盤のユビキタス図書館)

ユーラウンジでまず目に入ってくるのは、52インチLCD5台で構成された大型のインフォメーションパネルである(図4)。様々な情報から構成されており、タッチパネルで図書館のフロア案内やキャンパスマップなどを見ることができる。また、その隣には座席や施設の予約ができる機械であるキオスク端末が数台置かれており、学生が頻繁に予約している様子が伺えた。基本の利用時間は2時間でその後も空いていれば延長可能となっている。IDカードを通し、座席図で自分の好みの空席を選択し(図5)、座席番号が記載されたレシートを持って席へ向かうという仕組みである。



図5 キオスク端末



図6 Memoboard



図7 休憩スペース

が泳いでいた（図7）。

また、MOD と呼ばれるディスプレイ（図8）があり、動画や写真、IPTV などを見ることができ、前にテーブルが用意されており、学生たちがこれらのコンテンツを一緒に見ることが可能である。

デスクトップパソコンは、本やノートを置いて勉強できるように邪魔になるキーボードは排除され、タッチパネルとなっている。一方、アイランド型のグローバル PC コーナーでは、外国人利用者向けに各国言語対応での O/S やアプリケーション、各国仕様のキーボードを用意（フランス・ドイツ・ロシア・イギリス・日本・中国）している。

また、メモボードも設置されており、特定の相手にメッセージを発信することができる。今回は我々訪問団にウェルカムメッセージを用意してくださった（図6: Welcome to YUL の表題の下に、来訪者の氏名が表示されていた）。アルバイト情報や学生同士の伝言板としても使えるそうだ。何気ない機能ではあるが、日本では壁に紙のビラが貼られているのと比べても、電子化という部分では韓国が一步リードしていると感じることが多かった。そして、機能のひとつに休憩のスペースもあるというだけあり、ソファには遊び心かデジタルの池が埋め込まれ、スクリーンセバーのように鯉



図8 MOD

② Cultural Library（豊かなコンテンツを楽しむことができる複合文化空間）

電子資料閲覧システムも整備されており、タッチパネルで各国の新聞を閲覧することができる（図9）。日本の新聞も入っており見ることができた。E-book を閲覧できる機械もあり、延世必読書（Yonsei's must-read's）や新着図書、図書館司書推薦図書、ベストセラーなどを選択表示できる。所蔵資料の30ページのみ、そこで試し読みが可能であり、冊子体へ導く手法として機能している。

また、撮影スタジオ（図 10）と充実したメディア制作室、ミニシアターも設置されており、情報を探索するだけでなく新たな情報を作成して発信できる。もちろん DVD や VHS、ブルーレイなどマルチメディアを鑑賞できるエリア（図 11）や語学を学習できるブースもあり、様々なコンテンツを楽しむことができる。



図 9 電子新聞



図 10 撮影スタジオ

日本では図書館では学習という固定概念があるが、こちらのコンセプトでは、複合的な機能を持つ組織であるから授業でも使うが、休憩にも使うとのことだ。まずは居場所として利用してもらうということによって、利用者にとっての存在価値を高めているのかもしれない。

③ Convenient Library (快適で多様な用途別オーダーメイド研究学習空間)

さて、次に学習空間について述べる。広々として最先端 IT 機器が並ぶユーラウンジから段階形式になっている個別ブースの PC 利用席と閲覧席（図 12）を見上げることができる。この部分も企業による寄付で建設されたようで、寄付した企業のプレートが壁に埋まっていた。アメリカ大学図書館のように寄付文化が根付いているというよりも、卒業生が社会的地位に就いており、建物などを立てる際には案内をして寄付を募るようだ。ここ以外に、たくさんの寄付者のプレートが一斉に掲げられている場所があり、「寄付による図書館の充実、学習環境の改善による学習効果の高まり→図書館という空間への恩恵→そしてまた卒業生は後輩達の学習環境を整えるために寄付する」という好循環が成り立っている。



図 11 マルチメディア鑑賞エリア



図 12 閲覧席

もちろんグループ学習室もあり、協同学習やプレゼンテーションの練習も可能である。これらの施設

を目にする学生達は、課題をこなすのに十分に整った環境がここにあることを実感するに違いない。

■図書館司書との懇談

施設見学の後に司書の Lee Young Mi 氏と懇談する機会をいただいた。まずはこの大きな図書館施設をいくつかのセクションで管理して業務を行っているかを教えていただいた。図書館の組織は「経営管理チーム」「学術情報サービスセンター（レファレンス、リテラシー教育）」「学術情報支援チーム（収集、整理業務）」「利用者管理総合サービスチーム（貸出返却など）」「国学資料室」「デジタルメディアチーム」の6つの部署がある。これらの部署が互いに連携しており皆司書なので問題なくうまくやっているとのことであった。しかし、日本では昨今重視されてきているような他部課（図書館以外の部署）との連携は特に行われていないようで、その必要性もないという雰囲気であった。司書は専門職なので日本の私立大学のように図書館以外の部課に異動することはないが、最近では授業料を削減する取組のために、経営が圧迫されて異動を余儀なくされる大学もあるそうだ。

また、昨今では資料の電子化、施設のシステム化が進む中で司書としての仕事に変化しつつあることについて抵抗はないかについて質問をしたが、変化というよりも「新しい機能の追加」に過ぎないとのことだった。変化というと適応できない人もいるという懸念があるが、機能の追加であるため、再教育したり、セミナーをしたり、司書が新しいことを勉強すればいいだけであり、図書館の機能（役割）は昔から変わっていないととらえていることが印象的であった。

参考文献

延世大学図書館 HP : <http://library.yonsei.ac.kr/main/main.do>

②梨花女子大学校

訪問日：2012年6月29日（13：00～）

<大学について>

所在地	ソウル西大門区
WEB ページ URL	http://www.ewha.ac.kr/kor/index.jsp
学校種別	4年制、私立 女子大学
キャンパスの立地	都市
キャンパス寮	あり
学生数	学部生：15,272人 大学院生：5,974人
大学創立	1886年

<概要>

1886年に韓国で最初の女子大学として設立され、現在では世界で最大規模の女子大学である。学部は、社会科学、自然科学、工学、音楽、芸術、教育学、法学、ビジネス、医療、看護学、薬学など、12 College（学部）と、15の大学院コースがある韓国有数の総合大学である。大学の授業の20%は英語で行われ、世界で最も成功している大学の1つと言われている。また、中央行政機関や産学協力団などを備え、59の研究機関があり、付属病院もある。2008年にはキャンパスの中央にシンボリックな複合施設 Ewha Campus Complex（以下 ECC）が誕生し、より一層の飛躍がうかがえる（図1）。

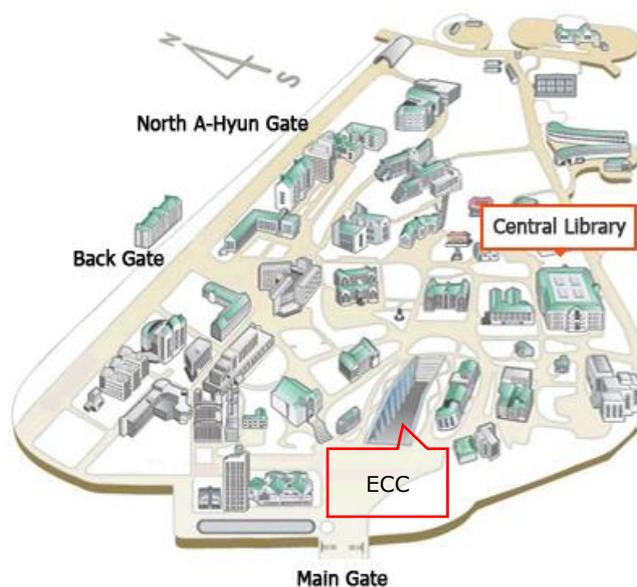


図1 キャンパスマップ[1]

<図書館概要>

梨花女子大学の図書館は中央図書館をはじめ、法学図書館、神学図書館、音楽図書館、医学図書館の5つの図書館がある。

メインの図書館である中央図書館（図2）は、1923年の梨花学堂時代に16,000冊からスタートし、1984年に現在の「梨花100周年記念図書館」に移転した。地上5階、地下1階の6階層の建物で、昔ながらの古き良き時代を感じさせる落ち着いた雰囲気のある図書館である。中央図書館の開館時間は、資料室が Semester 中の平日は9時から21時、土曜日は9時から15時、休暇中の平日は9時から19時（夏季）、土曜日は9時から15時となっている。館内にある Reading Room（閲覧室）は休暇中も24時間利用できる。蔵書冊数は150



図2 正面入り口

万冊を超え、およそ 9 千の冊子体雑誌や 19 万点の電子ブック、3 万を超える電子ジャーナルなどを備えている。館員は司書職、司書資格証所持者、その他を含め 67 名いる。

<館内施設見学>

定期刊行物課の Suk Jin-Hyung 氏の案内で中央図書館と ECC 内にある Reading Room を見学することができた。中央図書館の地下 1 階には Reading Room、Graduate Reading Room、コンビニエンスストア、学生ラウンジがある。1 階には Reading Room (図 3) のほかに、AV ルーム、PC ルーム、ラップトップコンピュータールームがあり、学生が静かに学習している様子がみられた。

今回視察した他の図書館と同様に梨花女子大学図書館でも館内の施設を利用するためにキオスク端末 (図 4) で予約をしていた。学生証 Student ID カードを端末にかざし予約を行う簡単な操作であるが、学生数に対して座席が少ないため、スムーズに席を確保するには大変便利なサービスである。利用は時



図 3 Reading Room



図 4 キオスク端末



図 5 ラップトップコンピュータールーム



図 6 電子新聞が閲覧できる大型モニター

間制となっているようだが、空いていれば続けて使えるようだ。座席を管理するためには図 3 のように椅子の背に座席予約システム用に割り振られた番号が貼り付けられている。1 階の西出入口のすぐそばにあるラップトップコンピュータールーム (図 5) では個人の PC を持ち込み学習していた。そのコンピュータールームの前のスペースには電子新聞が閲覧できる大型のモニター (図 6) があり、タッチパネルで過去 3 か月の主要紙が読めるようになっていた。

2 階には正面入り口があり、入館ゲートのそばには、大きな貸出しカウンターがある。そのカウンターの奥にはスタッフルームとコンピュータを備えたインストラクションルームがあり、ここではさまざ



図7 2階レファレンスルーム

また講座や授業とタイアップした情報検索講座などが行われている。我々も梨花女子大学図書館のサービスについてここで説明を受けた。

その他には新刊雑誌などの定期刊行物を揃えた雑誌室、レファレンスルーム（図7）、情報検索コーナー（図8、図9）、コースリザーブ室などがある。更に広い吹き抜けのホール（図10）があり、貸出しできない新聞や海外留学に関する資料や就職、旅行関連の資料を揃え自由に利用できるオープンスペースになっている。この図書館では、以前は荷物をロッ



図8 情報検索コーナー



図9 情報検索コーナー

カーに預けて入館していたが、今年の3月から荷物の持ち込みを許可した。また、蓋の閉まる容器に入った飲み物の持ち込みも可能で、館内にはウォーターサーバーも設置され、水を提供していた。

3～5階部分はおもに資料室になっており、DDC (Dewey Decimal Classification) により分類された主題ごとに配架されている。その他には Women's Study Collection (図11) が3階にあり、女子大学ならではの特色が現れているコレクションがあった。また、資料室の一角にはグループで学習できるガラス張りのスペース（図12）が設置されており、空間の使い分けもされていた。施設の面では、梨花女子大学図書館は午前中に見学した延世大学とは対照的な伝統的図書館のタイプである。図書館の机や椅子は昔ながらのがっしりとした木製のものが多く、現代的とは言い難い。しかし利用者のニーズに添うように適切に改善されている。たとえば利用者個人のPCの持ち込みにも対応できるよう、電源の差し込み口のある机が整備されていたり、大学の発行するIDとパスワードで館内の無線LANにアクセスできるようにICT環境は確実に整えられている。



図10 広々としたホール



図 11 Women's Study Collection



図 12 グループ学習室

<ECC 見学>

梨花女子大学のキャンパス中央に誕生した巨大なランドマークは、フランス国立図書館などを手掛けたフランスの建築家 Dominique Perrault（ドミニク・ペロー）によって 2008 年に建設された。坂の勾配を利用した左右 2 棟のガラス張りの建物（図 13）は、地上階には緑化エリアがあるのみで、地下に 6 階層の複合施設（66,000 m²）となっている。ECC はキャンパスセンターとしてその機能を有し、42 のセミナー



図 13 地上階から見下ろす ECC

ールーム、English Lounge、講義室、映画館、寄付者の名前を冠した文化ホール、カフェ、コンビニ、銀行、フィットネスセンターなど多種多様な施設が備えられている。我々が訪れた地下 3 階の Reading Room（図 14、図 15）は 1,000 席の座席数を持つ広い部屋で、中央図書館の Reading Room と同じくキオスク端末による予約制で、ほぼ 1 年を通じて（正月、創立記念日、クリスマスなどを除く）6 時から 22 時まで利用することができる（試験期間



図 14 ECC 内にある Reading Room



図 15 ECC 内にある Reading Room

中は 24 時まで利用可)。室内は柔らかい照明のもと、静粛な環境の中で黙々と学習できるエリアや、リラックスできるソファのあるエリア、ラップトップコンピュータを使える席など、まざまな目的に応じた設備が整っていた。

梨花女子大学図書館の最大の特徴はサービスにある。大学全体が持つ目標を達成するために、どれほどうまく図書館が機能しているかをつねに念頭に置き利用者サービスを行っている。梨花女子大学の文化活動、コミュニティーの発展、大学の持つ知識を通じて社会に寄与するという大学の目標をしっかりと支えている。その姿勢は 1 人ひとりの図書館員にもしっかりと根ざしているようだ。案内して下さった Suk 氏の説明中に「もっとよく」「よりよく」「もっといい」といった言葉が頻繁に出てきていた。「大学における研究活動がうまくできるようにサポートする」「もっと勉強がうまくできるように」「もっといいサービスを提供して簡単に情報にアクセスできるように」「学生が資料をうまく読みこなせるように」など、急速に変化する情報環境の中で、利用者の研究学術活動やニーズを満足させるために能動的なサービスを展開しているという。 Semester 中に行った情報検索講座は、授業と重なり出席できなかった利用者のために休暇中にくり返し開講され、また、正規の授業を録画したものを図書館に保存し動画講座として配信をおこない、授業の復習や補習に利用されている。そしていつも授業や教育（利用指導教育）を通じて利用者が何を求めているのかを調べているそうだ。そこから個人やゼミに特化したサービス、大学院の授業もサポートへと発展し教育に図書館がしっかりと根ざしている印象を受けた。

参考文献

梨花女子大学図書館 HP : <http://lib.ewha.ac.kr/>

[1] http://www.ewha.ac.kr/english/html/campusmap_eng/Map.html#

③東国大 東国大学校

訪問日：2012年6月30日（10：00～）

<大学について>

所在地	ソウル特別市中区
webページURL	http://www.dongguk.edu/mbs/kr/index.jsp
学校種別	私立総合大学
キャンパスの立地	都市
キャンパス寮	あり
学生数	学部生：22,602人、大学院生：5,396人
創立	1906年

<概要>

韓国を代表する仏教系の総合私立大学である。1906年の明進学校の設立にはじまり、1946年に大学に昇格し、東国大学となった。さらに1953年には大韓民国初の総合大学に昇格し、1978年に慶州キャンパス、2011年に一山キャンパスを開設した。図書館には禅と仏教に関する貴重なコレクションを有している。また演劇学部には、演劇、ミュージカル専攻が設置されており、韓国芸能界を代表する数々のタレント、映画俳優たちを輩出している。

<図書館概要>

今回はソウルキャンパスの中央図書館を見学した。中央図書館はキャンパスのほぼ中央に位置しており、キャンパス内には別に法律図書館と薬学図書館が設置されている。中央図書館は地下2階、地上4階建であり、屋上には庭園もあり、学生達の憩いの場となっている。蔵書数は約130万冊である。最先端の機器が導入されているわけではないが、必要な諸施設・設備が計画的に整備されており、平均的な韓国の私立大学図書館の全体像を把握するには相応しい図書館であると思われた。(図1)



図1 東国大学図書館外観

<館内施設見学>

4F	閲覧室
3F	仏教関係図書／閲覧席
2F	ゲート／カウンター／マルチメディア情報関係施設
1F	自然科学系図書／閲覧席
B1F	社会科学系図書／閲覧席
B2F	人文科学系図書／閲覧席

図書館の外壁はガラス張りを多用し、また中央部は地下2階から地上4階までの明かり取りも兼ねた吹き抜け構造になっており(図2)開放的である。入退館口は2階に設置されており、自動の貸出・返却装置も備えられている。

1階は自然科学系の書籍を中心に配架されており、レファレンスデスクも設置されている。また女性専用の休憩室も設けられている。さらに Jung-gu People Reading Room は地元の中区の住民専用の閲覧室であり16席確保されている。大学の地域開放の一環であろうが、ユニークな試みである。

2階の主たる用途は、マルチメディア関連施設である。

Multimedia Resources Room を中心に各種情報機器が配置されている。設置されているPC総数は75台であり、予約制の使用も可能であり、使用中の機器も瞬時に判別出来るシステムが整備されている。AVルームは席数67席であり、映画の上映や芸術学部の学生によるイベントなどに頻りに利用されている。さらに、User Education Room は情報検索実習などが行われるセミナー室で17席から成っている。(図3、4、5)



図2 内部吹き抜け



図3 Multimedia Resources Room



図4 パソコン使用状況表示

3階には東国大学の研究の中心である仏教関係の書籍が中心に配架されている。Old & Rare Materials Room には韓国の仏教関係の古典籍や貴重書が約3万冊収蔵されており、国宝1点、文化財13点も含まれている。また Buddhism Resources Room は仏教関係の資料の収集とともに仏教研究センターの役割も果たしており、専用ホームページも開設されている(<http://buddhism.dongguk.edu>)。

4階はワンフロアが全て閲覧室、PCルームであり、通常期は6時から24時まで開館されている。また試験期には予約すれば終日の利用も可能となっている。座席



図5 AVルーム

の予約は **Seat Assignment System** が導入されており、ID 化された学生証により自動予約が可能である。日本ではまだ同種のシステムは一般化していないが、韓国の大学図書館では基本設備となっているように思われた。屋上は前述したとおり庭園となっており、南山公園や忠武路の街並みが一望できる絶景を誇っている。

地下 1 階は社会科学系の書籍が配架されている。また **Special Books Room** は北朝鮮で出版された書籍を収集しており、貴重なコレクションとなっている。その他、レファレンスデスクなどが配置されている。

地下 2 階は人文科学系の書籍が配架されている。レファレンスデスクなどに加えて、教員専用閲覧室も設けられている。また **Midang Private Memorial Collection** は「未堂文庫」と呼ばれ、韓国を代表する詩人であり、東国大学の教授も務めていた徐廷柱の誌画などのコレクションが展示されている。同室は書齋が再現されたかたちとなっており、胸像なども設置されている。(図 6)

図書館の催しものとして、2 階の **Exhibition Hall** で仏教関係書画の展示即売会が開催されていた。同スペースは学生はもとより一般市民にも利用を開放しており、様々な展示や催しの場として広く活用されている。今回の書画の売り上げ金は全額大学に寄付されるとのことであり、大学の収入増にも一定の貢献がなされている。「場としての図書館」の一つの展開例であろう。(図 7)

参考文献

東国大学中央図書館 HP : <http://lib.dongguk.edu>



図 6 未堂文庫



図 7 展示即売会

④成均館大学校

訪問日：2012年6月30日（14：00～）

<大学について>

所在地	スウォン市長安区
WEB ページ URL	http://www.skku.edu/index_pc.jsp
学校種別	私立総合大学
キャンパスの立地	都市
キャンパス寮	あり
学生数	学部生：18,246人 大学院生：6,922人
大学創立	1398年

<概要>

成均館大学の前身は、李氏朝鮮時代の1398年に設立された国家教育機関を起源とし、1895年に3年制大学として、1953年に4年生総合大学として開校した。現在は2つのキャンパスにより構成されており、人文社会系学部はソウル市内に位置し、工学、科学、薬学などの理系学部はスウォン市内にある。このキャンパスはソウル市より45キロ南にあり、250エーカー（東京ドームの約20倍）の広大な面積がある。1996年のサムソン財閥との連携により、近年急速な発展を遂げている。



図1 成均館大学図書館外観

<図書館概要>

今回訪れたのはスウォンキャンパス内にある2008年に建設されたサムソンライブラリーである。地下2階、地上7階建てのガラス面を多用した独特な外観を持つ図書館である（図1）。延世・三星（サムソン）学術情報センター同様に、先端IT技術や機器を多く取り入れ、必要な情報に手軽にいつでもアクセスできることを念頭に置き、利用者の学術的活動や文化的活動などの多目的用途に応えることをコンセプトに置いている。館内は整然と机が並べられた学習エリアや、外部から仕切られたガラス張りのグループ学習室、飲食をしながらゆっくりと談義

ができる自由な空間などが、フロア、またはゾーン毎に使用目的により上手に仕切られている。視覚的にも開放感がありリラックスした雰囲気が感じられる。館内の気流は制御されており、吹き抜け構造となっている中央ロビー付近の各部屋は気温調整のためにエアカーテンと省エネな照明が施されているなど、エコロジーに配慮した構造となっている。しかしながら、強い直射日光が差し込む夏場は館内の温度も上昇し予想以上にメンテナンス費がかかるとのことだった。



図2 エントランスゲート



図3 エントランスロビーから天井を見上げる

<館内施設見学>

正面入口から入館し、ややS字型に見える形状の入館ゲートを通してエントランスへと進む。この湾曲したゲートは、入退館時に自然と歩行速度を減速させる効果がある（図2）。

エントランスロビーから天井まで吹き抜け構造のため、日光が差し込まれ（図3）、各階に配置されたグループ学習室が突き出た箱のように見渡すことができる（図4）。

7F	事務管理階
6F	事務管理階
5F	コミュニティゾーン（カフェ）、談話スペース
4F	閲覧室
3F	開架
2F	マルチメディアゾーン（編集室、上映室、プレゼン室）
1F	インフォメーションコモンズ / 閲覧室
B1F	閲覧室（24時間開室） / 会議場
B2F	書庫

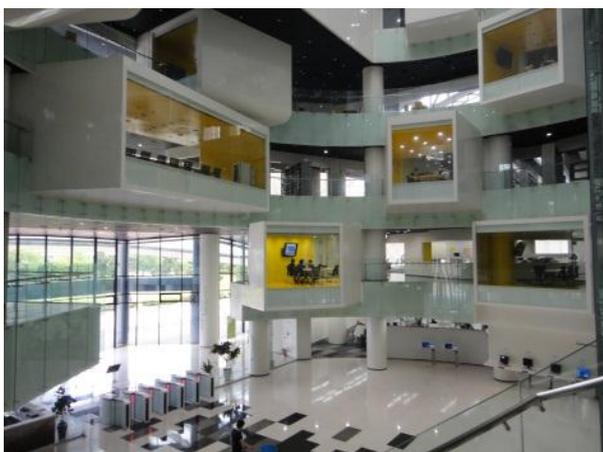


図4 エントランス付近



図5 グループ学習室

2階から4階に配置されたグループ学習室（図5）は、全部で12室あり、各室の設備やスペース、座席数などは数パターンある。特徴的な点はいずれの部屋の室内の壁は黄色に統一されており、明るい印

象を受ける。なお、この壁はホワイトボードと同様、水性マーカーで黒板代わりに使用することができる。

24時間開室している地下1階の閲覧室(図6)をはじめ、他にも1階、4階を含む合計6部屋の閲覧室があり、席数は全部で2000席以上あるとのことだった。書架などのない広大なスペースに等間隔に整然と机が並んでおり、椅子の脚先はローラータイプなので移動の際も音は気にならない。

1階は、Comnetと呼ばれるwebブラウジングのための部屋、つまりインフォメーションコモンズのゾーン(図7)があり、270台以上のノート型パソコンが配備されている。

期末試験終了直後に訪問したこともあり、残念ながら利用者のパソコン持ち込み率などは目にする事ができなかったが、wifiなど無線でのネットワークアクセスは大学内だけでなく、地下鉄やホテルでさえも、日本よりも遙かに便が良いので利用者は学内無線LANの使用にはあまりストレスを感じないのではないかと思う。



図6 閲覧室



図7 インフォメーションコモンズのゾーン

2階のマルチメディアゾーンには、メディア作品制作のためのマッキントッシュ製PCをはじめ様々なAV機器や、照明設備が施された撮影スタジオ(図8:就職活動用の写真も多く撮影されるとのこと)、40席程度のシネマルームある。また、視聴用のDVD/VTR閲覧ゾーン(図9)も人気があるようで、普段の開講中は混雑しているとのことであった。



図8 スタジオ

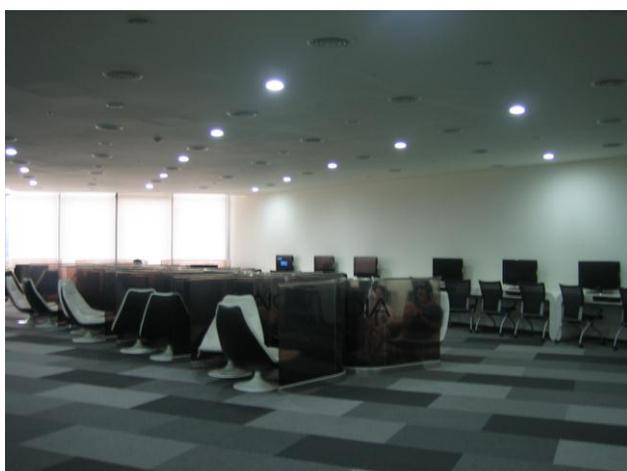


図9 DVD/VTR 閲覧ゾーン

この他には、語学学習専用のブースや、独特な三角型のテーブルのあるプレゼンテーション用の部屋などがある。

3階は書籍と雑誌の開架スペースとなっているが、本館の性格上かプリント版の所蔵はさほど多くなく、その代わりに電子ジャーナルや電子データベースの利便性を優先させているようだ。



図10 カフェ



図11 ソファ

5階は、カフェ(図10)を併設したフリーコミュニティーゾーンという位置づけで、見晴らしも良く、飲食も可能なフロアである。ここでは、リラックスしながら談義ができるように、様々なレイアウトのソファが並んでいて、中にはホワイトボード付きのソファ(図11)も見られた。

その他の利用者向けの印象的な設備としては、インフルエンザ流行の際に多様されたという資料の自動除菌装置(図12:使用方法は電子レンジと同様)や、デジタル式コインロッカー、携帯電話の充電装置(図13)などが見受けられた。



図12 自動除菌装置



図13 携帯電話充電装置

参考文献

成均館大学図書館 HP : <http://www.skku.edu/eng/>

2. 今回訪問した韓国大学図書館の特徴

◎充実したネットワーク設備と電子化

韓国では日本をはるかに超えたネットワークインフラが整備されているだけあり、今回訪問した大学図書館ではグループ学習室や端末の予約をシステム管理で行っているだけではなく、中には座席の予約まで図書館入口に配置されたキオスク端末（図1）からできるようになっていた。梨花女子大学図書館でのサービスに関するプレゼンテーションと図書館ツアーを丁寧に行ってくれた Suk Jin-Hyung 氏によれば、キオスク端末からの予約システムについては大学図書館だけではなく、公共図書館でも行われているところが数多くあるということ言われていた。

また、電子化が進んでいるということもあり、新聞を広げたような大きさのディスプレイで電子新聞や雑誌が読める端末が設置されており（図2）、利用者に提供されていた。それぞれの図書館で教育理念やスペースの利用方針などにより設置されている機器の新しさ、古さといった違いはあるものの、ネットワーク利用の充実ぶりをうかがい知ることができた。

日本のように、ラーニングコモンズブームのようなものは感じられなかったが、伝統的な図書館設備に加えて、様々な先進的な技術を取り入れつつラーニングコモンズ的な要素（グループ学習エリアや様々な講習会など）をそれぞれの大学の事情に合わせて用意されていることが分かった。一方で、現在、グループ学習のようなスペースがまだ準備できていない大学では、代わりにカフェや家がその代わりになっているという話を日本からの留学生から聞く機会もあり、グループ学習といったニーズが日本だけのものではないことを知ることができた。そして、米国でも見てきたが、韓国でも図書館が「知の交差点」としての大きな役割を担っており、大学の中でも学習支援の拠点としての重要な位置づけがなされていることを感じることができた。それは、先進的な図書館の建築に世界的に成長したサムソン電子のような大企業が出資しているというだけではなく、学部に応じた専門的な質問に答えられる体制ができていたり、ツアーや講習会といったサービスやコンテンツの充実にも見られたからである。

3. むすびにかえて

韓国は日本と隣同士の国ということもあり、長い歴史の中で互いに影響し合ってきている。近年では韓国のドラマのヒットをきっかけに韓国の俳優や芸能人が多く日本のテレビでの活躍をみることが出来る。一方で、70年近くの年月が過ぎてはいるが、先の大戦以降、現在に至るまでの様々な面での確執も存在していることは事実である。今回の訪韓で一番気になっていたことはこの確執について、韓国の人たちの日本人に対する反応である。日本でメディアによる報道だけを見てしまうと、そのニュースに



図1 キオスク端末で座席を確保している学生
(梨花女子大学)



図2 雑誌や新聞が閲覧できる大型ディスプレイ
(成均館大学)

関しての報道ばかりが強調されてしまい、韓国の多くの人たちが日本について良く思っていないのではという懸念があった。しかし、実際にそれぞれの大学図書館を訪問した結果、そのような懸念は完全に払拭された。現実的に横たわる日本と韓国の様々な歴史的、政治的、経済的その他の様々な問題は横に置いておいて、教育機関に携わるもの同士としての熱意や意欲というものを感ずることができたし、それを見学させてもらいに日本からきた我々に対する誠意や心遣いをとて深く感じることができた（図 3）。このことからだけでも、メディア報道のみを信じて物事を判断してしまうような傾向に非常に危うさを感じ、メディアリテラシー・情報リテラシーの大切さを感じ、文部科学省が平成 22 年に公表した「大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置付け」[1]の中で述べられている「大学図書館は、大学における学習、教育、研究活動の変化や新しい動向に対応し、より効率的な支援を展開するとともに、特に学生を中心とする利用者の情報リテラシー能力の向上にはより積極的に関与していくことが望まれる」という内容を改めて強く必要だと感じた次第である。

今回の視察にあたっては、参加メンバーの所属大学の国際交流大学を主な視察先として選ばせていただいた。その中で、現在、日本から留学中の学生たちとの意見交換をする時間を作っていただく幸運に恵まれた。留学生たちは、自分の出身大学ではない、日本人という点だけが共通点でかつ、その時が初対面である複数の大学の図書館員たちを前にして、きちんと自分の意見を臆せず述べていた。留学を通して、モチベーションの高い現地の学生を目の当たりにして、主体的に物事を考えることができ、それを表現できるようになっているようだった。アメリカも韓国も同様に学生の学習に対する意識の高さに驚いたが、それに良い影響を受けて成長している学生とのやりとりから我々も刺激を大いに受けることができた。

出典元文章

[1] http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm

大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあつて求められる大学図書館像－
文部科学省 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会，平成
22 年 12 月



図 3 土曜日の休日にも関わらず、出勤対応していただいた東国大学の職員の方々と

4. 謝辞

今回の視察は、公式な視察ではないにも関わらず、また、中には訪問させていただく日程が土曜日の休日にも関わらず、訪問先大学では、調整段階から、誠意のこもった対応をしていただきました。訪問先大学関係者の皆様には心から感謝を申し上げます。また、今回訪問させていただいた大学と視察参加大学との国際交流提携をしている大学では、引き続き活発な交流が行われていくことを期待します。加えて、今回の視察のきっかけは2011年度私立大学図書館協会海外集合研修であり、そこで選抜メンバーとの出会いと人的交流を深められたからこそ成し得たものと認識しております。今回のような貴重な経験を積むことができたことも、私立大学図書館協会国際図書館協力委員会の有意義な研修プログラムが多数用意されており、それを利用させていただいたことがきわめて大きいと参加メンバー一同、感謝しております。この場をお借りして、私立大学図書館協会はじめ、国際図書館委員会事務局関係者のみなさまには改めてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

各訪問先のお世話になったご担当者

【現地通訳】

姜 昌妊 氏

【延世大 学校】

Ms. Lee Young Mi

【梨花女子大 学校】

Ms. Suk Jin-Hyung

【東国大 学校】

Mr. Jung Jae-Hoon

Mr. Kim Jong-Chul

【成均館大 学校】

Mr. Kim Moon-Ki

Mr. Song Doosam

Mr. Hwang Do Yean